

## 自然保護の窓

### 1. チンパンジー保護活動の現状

今回は、チンパンジー保護・愛護委員会 (Committee for the Conservation and Care of Chimpanzees: 略称 CCCC) について紹介したい。1986年11月にシカゴ科学院 (The Chicago Academy of Sciences) で、“Understanding Chimpanzees” というテーマの国際シンポジウムが催された。これは、Jane Goodall が企画し、Paul Heltne が主催者となって、チンパンジーの第一線の研究者を一堂に集め、チンパンジーに対する理解を深めようという試みであった。Menzel, Gardner 夫妻, Fouts, de Waal, Wrangham, Kortlandt ら多くの有名人が集まった。日本からは、杉山幸丸、加納隆至、黒田末寿、長谷川寿一、長谷川真理子の各氏と私の7人が参加した。このシンポジウムの保護のセッションでの討論の過程から生まれたのが上記の委員会で、シエラ・レオネのウタンバ・キリミ国立公園の設立に貢献した Geza Teleki が音頭取りになった。

この委員会の目的は、名前の示すとおりであるが、この数年間でまず達成しようとしているのは、(1) アフリカのどの地域からも急速に数を減らしつつあるチンパンジーの現状をまずおさえ、(2) とくに危機的状態にある個体群を特定し、優先順位をつけて、順番に保護の手だてを考えること、また(3) 飼育下にあるチンパンジーの福祉を向上させるためマニュアルを作成すること、である。私たち日本からの参加者は、上の第二点について調査し、報告書を作成することを引き受けた。私たちは、WWFJ から昭和62年度の保護基金を受け、現在中間報告を作成中である。いずれ、本誌にもその要約を発表させてもらう予定である。この委員会が計画しているユニークな保護の方法は、若手研究者を優先順位の高いフィールドに送り込み、その研究活動によってまず保護の実をあげ、しかるのち保護区の設定など長期的な保護施策の提案を

していこうというところにある。保護資金は、主として The Jane Goodall Institute for Wildlife Research, Education and Conservation が募金によってまかなう。

アフリカ大陸に残存しているチンパンジー (ピグミー・チンパンジーを含む) の総数がどれくらいか、詳しいことは不明である。最大の見積りは21万頭であるが、その大部分はザイルやカボンなどチンパンジーの生息可能な未調査地域の推定値によるものである。確実に生息がおさえられているのは2万頭にすぎない。それにもかかわらず、肝炎・AIDSの研究にとって必須ということで、チンパンジーに対する需要は増大している。医学研究者の多くは、人間の病気の予防・治療のために使うのだからやむをえない、とそれを錦の御旗にしているが、チンパンジーの絶滅の方が、肝炎・AIDSの予防・治療法開発の遅れより、はるかに大きな損失である。なぜなら、前者は取り返しがつかないが、後者は代替の方法が十分考えられるからである。

米国では、NIHがAIDS研究のためには国内のチンパンジーだけでは足りないのを、海外からの輸入規制をゆるめなければならぬと主張し、WHOなどに圧力をかけようとしている。CCCCでは、これに対応すべく、WWF-USなどと協力して、米国内法におけるチンパンジーの保護規制をむしろ強めるべきだというキャンペーンを開始した。米国では、Endangered Species Act という法律により、輸出入を規制することによって、外国産の種をも保護している。ところが、チンパンジーは、その法律では“Threatened species”に分類されているにすぎない。これを、“Endangered species”に格上げしようというわけである。米国魚類・野生生物局 (U. S. Fish & Wildlife Service) は、見直しをするかどうかを判断するために、国内外からコメントを広くつづつた。その締切は、1988年7月21日であった。日本からも、有志がコメントを送った。米国では、ますます激しい論議がまきおこることだろう。その行方は、予断を許さない。

さて、CCCCは現在会員を募集中である。会員

はチンパンジーの研究者である必要はない。杉山氏や私のところに、会則があるので、関心のある方は請求して頂きたい。現在、日本人会員は22人にすぎず、日本のチンパンジー研究の歴史の長さ、層の厚さからいって恥しい状態である。私たちの世代がさばれば、まず間違いなく、多くの野生生物が地球上から永遠に失われるであろう。

## 2. 霊長類学会保護活動基金について

霊長類保護委員会は、1988年8月IPSの会計担当 Dukelow 氏に2,300ドル送金しました。IPSは将来自然保護にたずさわる、開発途上国の学生をフロリダ大学に留学させる制度をもっていますが（IPS Scholarship Program）、今回はその資金の一部として使ってもらうことにしました。

1988年1月1日から7月31日までに、霊長類保護委員会に寄せられた寄付は以下のとおりです。ご協力ありがとうございました。

（自然保護担当理事 西田利貞）